

Title	<研究論文>韓国語教育におけるパフォーマンス評価の導入の提案：口頭能力に焦点を当てて
Author(s)	趙, 卿我
Citation	教育方法の探究 (2013), 16: 17-24
Issue Date	2013-03-31
URL	http://dx.doi.org/10.14989/190404
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

韓国語教育におけるパフォーマンス評価の導入の提案

——口頭能力に焦点を当てて——

趙 卿我

1. はじめに

本稿は、韓国語¹教育における口頭能力の評価に着目し、実用可能なパフォーマンス課題やルーブリックを提案するものである。

韓国語教育における口頭能力の評価の研究は、大きく三つの観点から分類できる²。一つ目は、韓国語能力試験（TOPIK）と世界韓国語認証試験（KLPT）に公認されている評価に関する研究である。二つ目は、大学における韓国語教育のカリキュラムの中で行なう評価に関する研究であり、三つ目は、最近のパソコンを使用した評価ツールの開発研究である。

本研究が対象としたのは、日本の大学授業のカリキュラムの中で行なわれる口頭能力評価のあり方である。現在、日本の大学における韓国語教育の評価研究はごくわずかしかな存在せず³、しかも、いずれの先行研究も大学授業のカリキュラムの中で、特に口頭能力を評価するという観点からの具体的な提案や教育方法の提示は見当たらない。

言語教育において、口頭能力の評価の妥当性や信頼性を高めるためには、パフォーマンス課題やルーブリック（評価指標）を用いて、具体的な状況の中で実際に行動する過程（process）及びその結果（product）を評価する必要がある。すなわち、教師は、学習者の一人ひとりの言語発達プロセスを詳細に評価するとともに、総合的な評価も重視しなければならない。

しかしながら、現在の日本の大学授業における韓国語教育では、教科書の一冊を終えることを教育目標として掲げていることが多く、口頭能力に対する評価も教師個人に任されているのが現状である。従って、「何を評価するのか」は、教師各人の専門性と強く結びついており、口頭能力の評価が望ましいかたちで機能す

るか否かは、多くを教師の能力に期せねばならないことは言うまでも無い。

1980年以降、学習者中心の教育が注目されるようになり、学習の結果より学習プロセスを意識した言語教育が行なわれている現在、韓国語教育においても学習の最後に行われる試験という狭い評価枠から抜け出し、評価も学習の重要な一部分として認識される必要がある。

そこで本稿では、まず韓国語教育における「話す」能力の教育目標や具体的な評価類型に着目する。そして、大学授業のカリキュラムの中で活用可能なパフォーマンス課題やルーブリックについて提案を行いたい。

2. 韓国語教育における口頭能力評価の目標と類型

Han, Sang-miの研究（2008）⁴によると、韓国語能力評価の観点は、①言語的能力（語彙能力、文法能力）、②言語運用（pragmatics）能力（談話能力、課題・機能遂行能力）、③社会言語的能力（社会文化的能力）で大きく分けることができる⁵。

本研究では、韓国語教育における口頭能力評価のための実用可能なパフォーマンス課題やルーブリックの提案を目的としているため、②言語運用能力に焦点をあてていきたい。この話用的能力に対する評価規準は、表1の通りである。

表1は、Gang, Seung-hye（2005）⁶とHan, Sang-mi（2008）の研究をもとに、筆者が日本の大学において外国語として週2回（180分）の韓国語授業を受講している中・上級段階の学生を対象にし、口頭能力評価の教育目標を再構成したものである。中・上級段階の学生を対象にした理由は、図1で示したように（ii）の韓国語の場合は、（i）の英語の場合より、中・上級

段階の学習者の内部分布が不安定な状況であり、教材や評価ツールも初級や超級より不足しているからである。

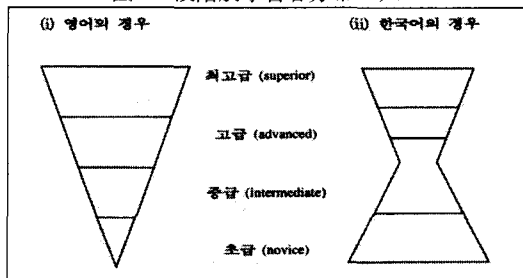
表1 韓国語の口頭能力評価の教育目標

話 用 的 能 力	談 話 能 力	多様な韓国語の表現を用いて日常生活、社会生活及び学問活動関連のテーマについてある程度やりとりができる。また、親しみがある社会的なテーマや抽象的なテーマについても論理的に話せる。
	課 題 ・ 機 能 遂 行 力	<ul style="list-style-type: none"> 日常生活で自身の意見を具体的に表現することが可能であり、周りの助けがなくても謝る、断る、説明する、比較する、同意する、尋ねるなどを適切に遂行することができる。 個人的、社会的状況、学問を目的とする状況の中で、自身が意図したことを誤解や弊害なく、韓国語で遂行することができる。 事前に準備した上での発表、情報交換など大学生活を送るための必須的な課題や技能を大体に韓国語で遂行することが可能である。

(Gang, Seung-hye (2005) と Han, Sang-mi (2008) の研究をもとに筆者作成)

現在、大学の韓国語授業における教育目標は、どのような文法、語彙や表現を教えるか、すなわち言語的項目に即して立てることが多い。この場合、テキストの項目順に進めていけばカリキュラムを終えることができるので、教師にとっては楽である。

図1 段階別学習者分布モデル



(Won, Jin-suk 「韓国語口頭能力評価基準設定のための研究 (한국어 말하기 능력 평가 기준 설정을 위한 연구)」 韓国語文教育研究所『韓国語文教育』1992年、p. 112.)

しかし、これではカリキュラムの項目を終えたのち、学習者が「韓国語を使って何ができるようになったのか」、つまり実用的な韓国語の運用能力が身についたのかどうかを評価することが困難である。それどころか、現況の大学の韓国語教育では、このような評価観点は欠けていると言わざるを得ず、教育目標として具体的に掲げられることも殆どないようである。

口頭能力の適切な評価には、まず、学習者の言語認知的な発達水準を考慮して、学習の段階や難易度による段階型・水準別のカリキュラムを設けることが必須である。教育目標は、そのうえで具体的に立てられなければならない。教育目標は、例えば「日常生活（実生活・真正性が高い状況）で自身の意見を具体的に表現する」など、韓国語を使って実際に何をするのか、日常における言語行動を目標とすることが必要である。すなわち、中・上級段階においては、課題に対する知識の「量」よりも、知識を「どのように活かすのか」という学習者の実践的なアプローチが求められ、それが同時に重要な教育目標になる。

こうした教育目標を達成するためには、具体的な評価類型と評価項目が必要となる。表2にそれを示す。

表2は、「外国語学習のめやす」(2012)⁷の研究（高等学校を対象）をもとに日本の大学において韓国語学習中・上級段階の学生を対象にし、筆者が再構成した評価類型である。

評価類型と具体的な評価項目は、現在大学の講義でよく使われているテキストを中心に⁸分類した。

前述したように、口頭能力の評価類型と評価項目は、何より教師の専門性に依拠して実践されるのであり、更なる評価の客観性や信頼性を高めるためには、教育活動の理論と実践方法を合わせて体系的に構築することが要求される。従って、教育実践を進める際には、大学教育という場の持つ可能性と限界を認識しながら、カリキュラムの編成や授業づくりのあり方を常に問い直す作業が必要となる。

それでは、以上のような実生活・真正性が高い状況を想定した課題に対する「評価」は、どのように実践したらよいのか。次節で考察し、具体的方法を提案する。

表2 口頭能力評価の評価類型と評価項目

段階	評価類型	評価項目
中高級段階	紹介する	自分や身近な人の特徴(得意なことや不得意なこと、性格など)について紹介することができる。
	面接する	卒業後の進路(進学する、就職する、留学するなど)及び将来就きたい職業や働きたい場所について、話しあうことができる。
	要約する	映画や簡単な小説などのあらすじや、イベントの見どころを話すことができる。
	発表する	関心を持っている研究課題と、その重要性の理由について説明することができる。また、図、絵、写真、表なども用いて情報を分りやすく伝えることができる。
	インタビューする	話し手が直接的、間接的(電話、インターネットなど)に接触し、話しことばまたは事前に準備した書きことばを通して行なう双方向のコミュニケーションができる。
	質問を聞いて答える	好きなことやもの・人について、その理由を含めて、口頭でまたは書いて紹介することができる。

(「外国語学習のめやす」(2012)の研究をもとに筆者作成)

3. 韓国語教育における口頭能力評価方法の提案

(1) パフォーマンス課題

一般的に遂行(performance)とは、具体的な状況の中で実際に行動する過程(process)及びその結果(product)である。教育現場での教授・学習の新しい代案として追求される「パフォーマンス評価(performance assessment)」とは、学習者自らが自身の知識(knowledge)や技能(skills)を表現できるようなかたちで、産出物(作品、問題解決の仕方、制作過程、発表などを包括してこう呼ぶ。)を制作したり、行動に表したり、答えの構成をすることに対する評価方式である⁹。また、多肢選択式試験のような従来の評価システムとは異なり、知識の量的な活用ではなく、質的な活用とその表現が重要な評価対象とされる。

そして、この評価法は「パフォーマンス課題」において活かされる。パフォーマンス課題とは、学習者が

達成しようとする目標と同様に多様であり、作成は簡単なものではない。グラント・ウィギンス(GWiggins)は、形式と利用の点から、多くの場合、パフォーマンス課題は三つの幅広いカテゴリーに分類している、とする。①「短い評価課題(short assessment tasks)」、②「イベント課題(event tasks)」そして、③「拡張課題(extended tasks)」である。

①「短い評価課題」では、学生がある学習内容の中で、基本的概念、手続き、関係、思考スキルなどをどれほど習得しているかを判断するために多く使用されている。このような課題は通常、完了までに数分しかかからないことから、一つの評価の中で組み合わせられる。このような課題の事例としては、「オープン・エンドな課題(open-ended tasks)」「発展的な多肢選択式問題(enhanced multiple-choice questions)」「概念地図法(concept mapping)」¹⁰などがある。

②「イベント課題(event tasks)」では、作文の流暢さと問題解決スキルなど、幅広いコンピテンシーを評価するよう作成されている。イベント課題は、特定の教科分野に限って使用されることが多く、学生がすでに知っていることだけではなく、さらに彼らがどれほど適切にその知識を使用しているかを浮き彫りにできるよう作成されている。このような課題は通常、完成するまでにある程度の期間が必要である。評価については、教師の観察、学生のパフォーマンス事例の採点記録、自己評価、仲間による評価、またこれらのアプローチを一部組み合わせたものに基づいている。

③「拡張課題(extended tasks)」は、長期にわたる多目的プロジェクトで、学期や学習単元の最初に割り当てられている。活動や工程は、学生がこのような課題をやり遂げられるように支援するため、カリキュラムの中に位置づけられている。拡張課題の多くは、特定の教科分野における長期プロジェクトの形式をとっている。その他の拡張課題は学習コースの最後に、修得したことの演示(rites of passage)として利用できるよう作成されている。

現在、日本国内で使用されているテキストを中心に、パフォーマンス評価の本質がより具体的に示されるタスクの例を挙げると、図2から図4を取り上げることができる。

このようなオープン・エンドの課題では、様々なア

ブローチが可能であり、学習者が自ら解答を組み立てる際に、いくつかの道筋をたどらなければならないことがわかる。また、学生に「刺激（課題の素材）」が提供され、その後に独自の応答を伝えることが求められる。

教師は、学生が書いた簡単な解答や、答えに至る数学的解決法、スケッチ、図表などを通して、創意的な言語活用などを評価する。

図2 オープン・エンドな課題

2. 示された質問事項を参考に質問の文を作り、インタビューしてみよう。

事項	質問
(1) ビビンバを食べてみた	
(2) 韓国に行ってみた	
(3) 車を運転できる	
(4) 韓国の歌を歌える	

(李潤玉他『韓国語の世界へ 初中級編』白水社、2011年、p. 79。)

さらに、このオープン・エンドの課題は、学生にこれら独自の質問や状況を考えさせることによって、よりオープンエンドなものになっていく。このように展開させることで、学習の積極的な動機づけや、様々な方法での問題解決力を養うことも期待できる。

図3の「発展的な多肢選択式問題」では、単純な選択式ではあるが、取り上げている内容に特徴がある。従来の多肢選択式に比べて、より「真正性(authenticity)」が高い状況の中で、正答を決定するために求められる思考を刺激するように作成されている。ここでは、目標言語の文化的基礎知識、(1)から(9)までの項目の関係性の把握などをどの程度習得しているかが評価される。

図3 発展的な多肢選択式問題



(康承恵『楽しく学ぶ韓国語』ダラクウン、2010年、p. 36。)

言語教育では、目標言語圏の文化の基礎・基本的な知識の習得を土台にした上での言語活用こそ、永続的な知識・理解に繋がると言える。従って、目標言語の文化的な背景に関する知識を要しない選択式課題なら、取り組む価値は低いと言えるであろう。

テキストの内容全般において、日常生活における経験をもとにして学生が学習プロセスでどの程度習得しているかを確認するために、「実際状況での問題解決能力を伸張」することが重視されている。

2010年以降に出版され、日本の大学で使われているテキスト¹¹では、「パフォーマンス課題の多様化」の特徴も見られ始めている。

次節からは、パフォーマンス課題¹²の評価方法について、具体的に見ていくことにする。

図4 イベント課題

① いっしょに話しましょう。

(1) 한국어를 공부하면서 한국에 대해서 새롭게 알게 된 게 있어요?
좋은 점은 뭐예요? 나쁜 점은 뭐예요?

(2) 여러분이 알고 있는 한국 친구에 대해서 이야기해 주세요.
그 친구를 어떻게 알게 됐어요? 어떤 사람이에요?

한국 대학에 대해서

② 韓国語を学んだ感想を書いて発表しましょう。

(金順玉他『チャレンジ韓国語』白水社、2011年、p. 85.)

(2) ルーブリックの活用

パフォーマンス評価を行なう際、重要な作業がある。それは、パフォーマンス課題に対するルーブリックの作成である。前述したパフォーマンス課題の選定と開発、ルーブリックの作成は異なる作業であるが、いずれも教育目標を達成するための評価規準を明確化する、という点で欠かせない。

従来の評価（多肢選択式評価）とは異なるパフォーマンス評価の特徴は、ルーブリックを用いて学習者の遂行の過程及びその結果を評価することである。ラテン語の「赤い色」を意味するルーブリックは、宗教礼拝行事の指針や法院の重要な決定事項を強調するために赤い色を使用したことが起源であり、「重要な意味を含む」ことを意味する¹³。

ルーブリックは、課題に対する学習者の実践的なアプローチを、手続き（過程的・方法的）的な知識を重視しながら、その成功の度合を段階的に分類した評価指標である。各段階から読み取ることができる特徴を、

個々の学習者の素質や特性に合わせて作られる。具体的には、課題領域（task dimension）に対する遂行のレベル（scale）と課題記述語（task description）で構成されている。

「遂行のレベル」は、与えられた課題をどの程度、解決しているかを段階で区分する。現在、韓国や日本の教育現場では、1段階（初級段階）から3段階（高い水準の学力）か、1段階から5段階（上級段階）となっている例が多い。

また、ルーブリックは、パフォーマンス課題の特性や使える目的に基づいて、① 総合的ルーブリック（generic rubric）、② 分析的ルーブリック（analytic rubric）、③ 発達のルーブリック（developmental rubric）、④ 課題ルーブリック（task rubric）に分けられる。

① 総合的ルーブリックは、遂行の結果を段階に基づいて総合的に判断する評価方法である。例えば、学習者の多様なコミュニケーション能力、総合力、文を書く能力などは個別にはではなく、段階の中で総合的に課題叙述により示される。

② 分析的ルーブリックは、評価領域別で示されている遂行内容を、段階別に判断する評価方法である。例えば、口頭能力を評価するためには、語彙、文法表現、流暢さ・発音・わかりやすさ、構成、内容に関する知識、アイコンタクトの有無がそれぞれ領域として区分され、課題叙述が示される。

③ 発達のルーブリックは、学習者の遂行の推移・発達を評価する。すなわち、ある遂行が示す固有の発達過程を、初歩段階から専門的と言える高い段階まで、どのように変化し発達しているのかを質的に評価する。

④ 課題ルーブリックは、特定の単元やテーマに対して学習者がどのように理解しているのかを評価する。

本研究では、第3節の(1)で採り上げた3つのパフォーマンス課題の中、「オープン・エンドな課題」（p. 4, 図2）と図3の「イベント課題」に対するルーブリックを提案していく。

まず、図2の「オープン・エンドな課題」に対するルーブリックは、表3の通りである。

表3は、韓国語でインタビューを行なうという課題に対するルーブリックの提案である。課題ルーブリックは¹⁴、他の①から③のルーブリックに比べて、単元

やテーマに基づいて学習者がどのように学習を理解しているのかに、より注目するものである。評価の過程・結果を統一するため、同レベル（課題別）によるモデレーションとベンチマーク（benchmarks）¹⁵の構築が重要である。

表3 インタビューに対する課題ループブリック

学習目標：インタビューする人を決めて実際に韓国語でインタビューを行い、インタビューを行なう上で必要な言語表現、インタビューから得た情報を正確にまとめて話すことを目指す。		
評価 規 準	4 学習目標以上を達成	インタビューのテーマに合わせて計画を立て、多様な言語表現を活用しながらインタビューを行なっている。インタビューを行なう上での言語表現やインタビューから得た情報を正確にまとめて話している。
	3 学習目標を達成	インタビューのテーマに合わせて計画を立て、インタビューを行なうが、そのプロセスに多少言語表現に問題がある。インタビューから得た情報をまとめて話している。
	2 学習目標まであと少し	インタビューが上手く行なわれていない。インタビューから得た情報を話すのときどきスピーチが遅くなったり、言いよどみ、沈黙がある。
	1 学習目標まで努力が必要	インタビューのプロセス、インタビューの情報が準備・把握されていない。長い沈黙があったり、声が小さくなったり、口の中でつぶやくようなところもある。

（筆者作成）

また、評価を行なう際には、評価の対象となる教育目標・内容・尺度・結果が根拠とともに、事前に学習者に提示されることが必要である。このことによって、教師と学生が互いの評価について理解を高められる。

そして、図4の「イベント課題」に対するループブリックは、表4の通りである。

ループブリックは、学習者に、自身の学習がこれからど

のように評価されるのかを理解させるための効果的な道具になる。従って、学期のはじめに課題と関連して「どのような遂行が素晴らしいものであるのか」を討論し、教師は、学習者とともに各教科内容に適切な「記述語（descriptors）」を作っておくことが望ましい。

表4 口頭能力に対する総合的ループブリック

4 学習目標以上を達成	<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマについて説明し、その重要性の理由についても説明している。 言葉の伝達は、とても丁寧であり、話す文章の構造も比較的に正確で論理的である。 発表中、継続的に聞き手とアイコンタクトを保ち、ノートに頼ることはない。 発表のテーマに対する準備（資料、教材など）を丁寧にしており、聞き手の質問に対して適切な情報を提示しながら明確に答えている。
3 学習目標を達成	<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマについて説明し、その重要性の理由についても話している。 言葉の伝達は、とても丁寧であり、結論について正確に話している。 発表中、聞き手とアイコンタクトを保ちノートに頼ることが少ない。 発表のテーマに対する資料などの準備があり、聞き手の質問に対して情報を提示しながら答えている。
2 学習目標まであと少し	<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマについて話しているが、説明にはなっていない。 言葉の伝達は、ときどき途切れ途切れになったり、結論について話していない。 発表中、聞き手と時々アイコンタクトをとっているが、ノートを読んでいることが多い。 発表のテーマに対する準備が不足しており、聞き手の質問に対して満足に答えられない。
1 学習目標まで努力が必要	<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマの重要性を認識していない。 話が聞き取れない。 発表中、聞き手とのアイコンタクトが少なく、常にノートを読みながら話している。 発表のテーマに対する聞き手の基本的な質問に対して答えられない。

（筆者作成）

評価内容については、学生・教師の間に誤解や齟齬がないように、同一の理解を得ておくことが重要であ

る。すなわち、「観察可能な行動用語」(言葉)で教師が求めている遂行内容を明確にするべきである。

ルーブリックによって、教師は点数で表すことができる。そのうえ、ルーブリックは学生自身が自分の遂行の到達度はどの程度で、どのようにして自分を向上させていけばよいかを自己評価する助けにもなる。ルーブリックにはこのような利点があるが、十分に活用するには、学生の多様な要求や異なる目標に合わせて継続的に修正・改善することが求められる。

以上のように、パフォーマンス評価を採用することによって、たんに評価方法を改める機会となるのみならず、発展的・永続的な学習内容の改善に活かすことができる。パフォーマンス評価は、学習改善ための評価という考え方をもたらしたと言える。

4. まとめと課題

本稿では、日本の大学における韓国語の口頭能力(「話す」能力)の評価に焦点をあてて、実践可能なパフォーマンス課題やルーブリックを提案した。韓国語教育における教授・学習に関する省察は、カリキュラムの全盤において行なう必要があると考えているが、本研究では、まず「話す」能力を評価することを目的としたルーブリックを検討し、評価プロセスの改善の可能性について考察した。

第2節では、韓国語教育における話す評価の教育目標と具体的な評価項目に対する提案をした。話す評価の教育目標では、目指す教育目標をできる限り学習者の言語認知構造の継続的な量的・質的变化を考慮して、学習の段階や難易度による段階型・水準別のカリキュラムを設けて構成する手立てが必要であることを述べた。また、学生の韓国語能力の向上という観点から、「韓国語を使って何ができるのか」を評価する必要があること、実生活・真正性が高い状況で自身の意見を具体的に表現する、などが項目として重要であることを指摘した。

第3節では、韓国語教育における口頭能力の評価方法として、パフォーマンス課題とルーブリックの実践例を取り上げ、パフォーマンス評価の導入と実施の意義について議論した。結論として、パフォーマンス評

価は、評価法の単なる多様化ではなく、評価が教授・学習の過程にもなり、それを促進することにも繋がっていく発展的な評価法であることを述べた。特に、ルーブリックの活用は、教師が学習者に画一的に教え、結果的な知識を得たかどうかを重視する学習理論から、個々の学習者の個性や特性に合わせた手続き的(過程的、方法的)知識を重視する学習者観への転換をもたらすことが可能となるであろう。

しかしながら、評価側(教師側)にとってのパフォーマンス評価は、一クラスの学生数、教える内容と量、評価時間の確保、評価の客観性及び一貫性の保持といった点から、実施が容易ではないことも事実である¹⁶。特に、パフォーマンス評価の共通的評価規準を設けて適切に実施することは、現在多くの韓国語授業を非常勤に任せている日本の状況では、難しいことでもある。

しかし、韓国語教育においても学習者の真のコミュニケーション能力を測定するためには、従来のような評価法では不十分なことは明らかである。特に、学びの場である大学等の機関において、学習者の発展的な言語能力の開発を期す授業を行なうためには、評価の妥当性や信頼性にもとづくパフォーマンス評価の導入が有効であると考ええる。しかし、未だ同評価に関する基礎研究も十分とはいえず、更なる議論と検証が必要なることは言うまでもない。

韓国語教育に関する今後の課題としては、まず、CRESST¹⁷・KICE¹⁸の形成的評価プログラムの教育効果を検討することである。

CRESST・KICEの形成的評価プログラムの枠組みを用いることで、教師による評価の着目点がどう変わり、それがどのような授業活動への展望を開くのかを検討したい。そして、形成的評価プログラムの教育効果を手がかりに、韓国語教育における形成的評価とパフォーマンス評価との関係性及び相互補完の可能性について追っていきたい。

注

¹ 韓国語は、現在7,500万人を超える話者が使っている言語であり、世界でも15位に入る言語である。

² I, Hyang 「話す遂行評価での発音範疇採点の最適化
方案研究 (말하기 수행 평가에서 발음 범주 채점의

최적화 방안 연구)」国際韓国語教育学会『韓国語教育』2012年、p.302。

³ 金 泰虎 「韓国語教育における新しい成績評価：教師と学習者が共に行う形成的評価」『言語と文化』第10巻、2006年、pp. 189-202。

⁴ 特集目的 (Specific Purposes) としての言語教育の評価は、配置評価 (placement tests)、成就度評価 (achievement tests)、熟達度評価 (proficiency tests) の類型に分けて行なわれている。

Hutchinson, T. & Waters, A., *English for Specific Purposes*, Cambridge University Press, 1987, p.146.

⁵ Han, Sang-mi 「国内学問目的韓国語教育 1-大学入学前課程の話す評価を中心に- (국내 학문 목적 한국어 교육 1-대학 입학 전 과정의 말하기 평가를 중심으로-)」国際韓国語教育学会国際学術大会発表資料集、2008年、pp. 113-128。

⁶ Gang, Seung-hye 「韓国語高級話す評価のツール開発基礎研究-高級話す討論活動を中心に- (한국어 고급 말하기 평가 도구 개발 기초 연구 -고급 말하기 토론 활동을 중심으로-)」『外国語としての韓国語の教育』、延世大学韓国語学堂、第30号、2005年、pp. 1-21。

⁷ 国際文化フォーラム「外国語学習のめやす 2012 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言」2012年。

⁸ Bak, So-yeon 「日本大学で使用する韓国語テキスト分析-使用頻度が最も高いテキストを中心に- (일본 대학에서 사용하는 한국어 교재 분석-사용빈도가 가장 높은 교재를 중심으로-)」国際韓国語教育学会、『韓国語教育』2011年、pp.99-121。

⁹ 国立教育評価院編『パフォーマンス評価の理論と実践 (수행평가의 이론과 실제)』大韓教科書株式会社、1996年、p. 32。

¹⁰ 比較的新しい評価ツールである概念地図法は、概念とそれらの関連性についての学生の理解を調査するために利用されています。概念地図法は、概念と概念間の関係を理解することを示すために、学生自身が作成した情報の集合、または網目のようなものである。このようなマップは、ページ中央の円や楕円に中心的な概念をまず書くことで作られている。

田中耕治監訳「パフォーマンス評価-本場に『大事

なこと』をテストする-」ダイアン・ハート著『パフォーマンス評価入門 -「真正の評価」論からの提案-』ミネルヴァ書房、2012年、pp. 66-67。

¹¹ 李潤玉他『韓国語の世界へ 初中級編』白水社、2011年、康承恵『楽しく学ぶ韓国語』ダラクウン、2010年など。

¹² 西岡加名恵は、パフォーマンス課題を与える場合は、パフォーマンスが行なわれている必然性のある文脈を設定し、パフォーマンスの目的と相手、子ども(学習者)が果たすべき役割、生み出すべき作品、評価の観点を明瞭にした課題を作ることが重要であると述べている。

西岡加名恵「パフォーマンスの評価」『悠・プラス』第9月号、2007年、pp.78-79。

¹³ Wiggins, G. *Educative Assessment*. San Francisco : Jossey-Bass, 1998.

¹⁴ Gim, Yong-Chun, 「現場の教師のための教育評価 (현장 교사를 위한 교육평가)」ムンウン社、2007年、p. 206。

¹⁵ ベンチマーク (benchmarks) とは、採点ルーブリックに対するパフォーマンス事例のことである。

¹⁶ 韓国教育課程評価院「初等・中等のパフォーマンス評価現場適用評価及び改善方案研究 (초·중등학교 수행평가 현장 적용 평가 및 개선 방안 연구)」2001年。

¹⁷ CRESST とは、National Center for Research on Evaluation, Standards, and Student Testing の略語である。CRESST ホームページ (<http://www.cse.ucla.edu/>) を参照 (2013年3月3日最終確認)。

¹⁸ KICE とは、Korea Institute for Curriculum and Evaluation の略語である。ホームページ (<http://kice.re.kr/en/index.do>) を参照 (2013年3月3日最終確認)。

(博士後期課程)